

〔江戸名所圖會 五ノ一〕道灌山聽蟲○圖略

文月の末を最中にして、とりわき名にしあふ虫塚の邊を奇絶とす、詞人吟客こゝに來りて、終夜その清音を珍重す、中にも鐘兒まつむしの音は勝て艶しく、莎鷄はたかき紡績娘くすのあはれなるに、金琵琶すむしの振捨がたく、思はず有明の夜を待ちたるも一興とやいはん、まくり手にすゝむしさがす淺茅かな其角

〔東都歲時記三七月〕虫聞夏の末、秋の初より、眞崎 隅田川東岸 王子邊 道灌山 飛鳥山邊道灌山は松虫多し、飛鳥山は

鈴虫 三河島邊 御茶水 廣尾の原 關口 根岸 淺草反圃

〔備前老人物語〕松永彈正、松虫を飼けるに、さまざまに養ければ、三年までいきけり、

〔嬉遊笑覽十二禽蟲〕松虫の卵を取ることは、寛政七年の比、江戸にて何人か考て始むと云、按るに備

前老人物語に、○中略松虫の三年生たりとは、うけられぬことなり、これ極て、其卵をかへして養

ひ、年々其法の如くせしなるべし、

〔嬉遊笑覽十二禽蟲〕秋の末に小瓶に土を入れて、其内に鈴虫の雌を移し、緜子はりの蓋をおほひ、日なた

に出し餌を飼日を経れば衰へ死するを、其儘にして蓋をおほひ、稻草にて包、雨露のあたらぬ土

を上に置緑の下翌年五月の初ころ包みをとぎ、蓋上より日にあて置ば、やがて土中の卵かへり

て、微細の虫數多生出て、日を重ねて大になる時、瓶の内狭き故、他の器に分ち置べし、虫小きうち

は、瓶のふた紗の類を用ひてよし、そだつに隨て籠に移すべし、紗などをば昨破るなり、餌は茄子

を用、また細き葉の草に水を洒ぎて入置べし、茄子なくなる頃には、虫も死するなり、かくすれば

年々絶ることなく、多く出来るものなり、松むしは此まかたにてはかへらす、帝京景物略に、促織

秋盡則盡、今都人能種之、留其鳴深冬、其法土子盆養之、蟲生子土中、入冬以其土置煖炕、日水灑綿覆

之、伏五六日、土蠕々動、又伏七八日、子出白如蛆、然置、子蔬菜仍灑覆之、足翅成漸以黑、匝月則鳴、鳴細

飼蟲